

私共が敬愛してやまない崔書勉院長が、今年二〇一七年五月で、日本上陸六〇周年の大きな節目を迎えられるという。半世紀もの長きにわたり日韓間を行き来しながら両国の間を、様々な意匠の糸でつないでこられたのであった。無論その中には我々には見えていない糸があったかもしれない。

院長の行動はあまりにも幅も奥行きも広く、かつ深く全容を知るといえるのは容易なことではないのである。

院長に教えていただいた事柄は余りにも多い。思い出すだけでも、安重根と日韓関係、竹島(独島)問題の歴史と日韓関係、日韓関係の歴史とその裏面史、日韓条約交渉の歴史とその裏側、韓国とモンゴル関係――挙げてみれば枚挙にいとまがない。

だが山下にとってこうした知識、情報はもちろん重要かつ貴重だったが、それ以上に院長から授かったのは日韓関係に関わった様々な人々、中でも韓国外交部の皆さん方をご紹介いただいたことである。

その方々は、韓国外交部の中でも韓日関係に携わってきた方々であった。

院長は折に触れて東京の駐日大使館や韓国外交部本省の方々をご紹介下さった。

そもそも山下が院長の知遇を得たのは一九八七年のことであった。

この年、山下は日韓記者交流の訪韓団の一員としてはじめてソウルを訪問することになった。

これは両国の政府ベースで相互に記者を招待し、相互理解を深めようとの企画であった。確か、一週間程度の日程であったと思う。その間、浦項製鉄所、三十八度線地帯の見学、韓国外相との会見、政府高官による幾つかのブリーフィング、などが盛

り沢山に設営されていた。

出発前、政治部先輩の西村多聞さんから「韓国に行くのなら、この方には是非会ってお話を聞いておきなさい」と紹介されたのが院長であった。赤坂辺の韓国料理屋だったような気がする。

西村さんと院長は相当親しい様子で、しばしばお酒の席を一緒にしておられるようであった。

記者交流旅行が順調に進んでいた日程半ば頃、ソウルのホテルに院長から電話があった。

「今ソウルにいますので、今晚会いたい」との事。連れて行かれたのは、漢江近くにある「真味」という韓国式の本格料亭であった。

しかも、部屋には当時の韓国外交部のゴンビョンヒョン・アジア局長も座っておられた。山下は日本側記者団の中の一人に過ぎない。院長は東京からわざわざソウルに戻り、山下を懇意なゴン局長に引き合わせて下さったのである。誠に有り難いことであった。ゴン局長は後に駐中国大使を務められた。院長は山下と世代の近い韓国外交官の当時の若手もご紹介下さった。主な方のお名前を記させて頂くと

キムソグウさん(後に統一院次官)、

ユビョンウさん(後アジア局長、大阪総領事)、

シンカクスさん(外交部次官、駐日大使)

院長はこの皆さんから見て外交部の先輩というわけではなかったが、とにかく敬愛、尊敬されていた。

外交官出身ではないが、今韓国で共に民主党所属の国会議員となって活躍しているカンチャシルさん(済州島選出)も院長のご縁で知り合った。

カンさんが東大大学院博士課程に留学中、奥様が院長の主宰する東京韓国研究院(当時港区)にお勤めだった。この研究院に山

下が顔を出した際、院長がカンさんを紹介下さった。日韓関係史が専門のカンさんは韓国に帰国後、太田市の大学で教えていたが、元々学生運動家でもあったこともあり、郷里の済州島から国会議員に当選した。カンさんのご縁あり山下は済州島を合計六・七回訪れている。

山下は院長のお陰で、皆さんと今日に至るまで親しくお付き合いさせて頂き、なおかつ貴重な知識、情報も得させて頂いたのであった。

こうして見ると、山下の受けた恩は限りなく大きにも拘らず、そのご恩になんらお返しできていないのはお恥ずかしい限りである。

これから先、恐らくご恩返しのお機会があるとは想定しにくいし、又山下にはその力も能力もない。

これからも院長に付き従って、そのお言葉を聴くことで、日韓の関わりを理解する手がかりとさせて頂きたいものである。



